

# 物語を読む女たち

『源氏物語』蓬生巻と『更級日記』

伊 藤 守 幸

## 一

物語とは何かという問いを内包する物語——『源氏物語』とは、そのような物語である。しかも、その問いかけは、作者の内省の問題として作品の背後に隠されているばかりではなく、作中人物の言動を通じて、しばしば具体的な形で作品の表面に浮上してもくるのである。したがって、事の具体的なあらわれとして、『源氏物語』には物語を読む女性たちが数多く登場するということにもなるわけである（それが専ら女性たちであるのは、当時の物語享受の実態の反映にすぎない）。

ところで、物語を読む女性とえば、記録に残された限りでは最初の本格的『源氏物語』読者として、文学史上に特権的な位置を占めているのが、『更級日記』の作者菅原孝標女である。彼女の『源氏物語』に対する熱中ぶりはよく知られているところであるが、そうした『源氏物語』読者としての彼女の目に、作中に登場する「物語を読む女たち」の姿は、果たしてどのように映じていたのだろうか。以下、本稿では、蓬生巻の末摘花を取り上げて具体的に考察を加えていくことにするが、もちろん末摘花は、『源氏物語』に登場する大勢の「物語を読む女たち」の中にあって、格別代表的な存在というわけではない。むしろ目立たない存在であり、物語読者としてはおよそ冴えたところのない人物と言ってもよいだろう。そんな冴えない姫君と、早熟な文学少女（孝標女が『源氏物語』を暗誦するほど読

み込んだのは、数え年十四歳の時のことである」とを比較するのは、あるいは不穏当なことと思われるかもしれない。しかし、物語に熱中する少女の姿を描いた『更級日記』の描写と、蓬生巻における末摘花の描写の間には、類似性と対照性の両面において、興味深い関係が認められるのである。そこで、まず二作品の類似性から見ていくことにしたい。

## 二

蓬生巻の末摘花は、この姫君には珍しく物語など繕いてみせることによって、少女時代の孝標女と似通った姿を示しているわけであるが、『源氏物語』と『更級日記』は、このふたりの女性がそれぞれのようにして物語と向かい合っているかという、その状況の描き方においても共通の姿勢を示しているのである。とりわけ、彼女たちが身を置いている空間について、その荒涼ぶりを強調する両作品の筆致からは、顕著な共通性を読み取ることができる。

蓬生巻は、その題名からも知られるように、光源氏に忘れられた末摘花の邸宅（故常陸宮邸）の荒廃を描くことが一巻の眼目ともなっており、そのため、たとえば次のような描写が繰り返されることになる。

もとより荒れたりし宮のうち、いとど狐の住処になりて、うとましく、氣遠き木立に、梟の声を朝夕に耳にならしつつ、人氣にこそ、さやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬものども、所を得て、やうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬに……<sup>〔一〕</sup>

霜月ばかりになれば、雪霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬葎むくろの陰に深うつもりて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出で入る下人だになくて、つれづれとながめたまふ。

一方、『更級日記』の場合、『源氏物語』耽読の場面に代表される少女期の物語熱を描いた一連の文章は、次のようなふたつの記事の間に置かれているのである。

いと暗くなりて、三条の宮の西なる所に着きぬ。ひろびろと荒れたる所の、過ぎ来つる山々にも劣らず、大きにおそろしげなる深山木どものやうにて、都のうちとも見えぬ所のさまなり。ありもつかず、いみじうものさわがしけれども、いつしかと思ひしことなれば、『物語もとめて見せよ、見せよ』と、母をせむれば……<sup>(2)</sup>

足柄といひし山の麓に、暗がりわたりたりし木のやうに、茂れる所なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山辺よりも異に<sup>け</sup>いみじくおもしろく、錦を引けるやうなるに、外より来たる人の、「今、参りつる道に、紅葉のいとおもしろき所のありつる」と言ふに、ふと、

いづこにも劣らじものをわが宿の世をあきはつるけしきばかりは

127

「越の白山」、「足柄といひし山」といった具合に、それぞれ山の名前まで引き合いに出している辺りに、それとなく響き合うものを感じ取ることのできる文章である。しかも、末摘花と孝標女の物語を読む姿は、それぞれ右のような記事の間の部分に描かれているのであり、そうした点に、構成面の類似性を読み取ることも可能である。ただ、ここに足柄山という地名が出てくることについて一言しておく、孝標女が、この山に対して実際にきわめて強い印象を抱いていたことは、上洛の旅の記の描写に照らしても明らかであり、この地名がそのような個人的記憶に根ざして

持ち出されたものである以上、この程度の類似を以て、蓬生巻と『更級日記』の影響関係の直接的証左とまで見なすことは、もちろん不可能であろう。しかし、蓬生巻には、右のような表現のほかにも、たとえば次のような発言も登場してくるのである。

邸宅の荒廢、生活の困窮に堪えかねた女房の、末摘花に対する進言である。

「なはいとわりなし。この受領どもの、おもしろき家造りこのむが、この宮の木立を心につけて、放ちたまはせてむやと、ほとりにつきて、案内し申さするを、さやうにせさせたまひて、いかうもの恐ろしからぬ御仕ひに、おぼしうつろはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪へがたし」

このような言葉を、孝標女は果たしてどのような思いで読んだのであろうか。ここに記されている事柄は、彼女にとって決して他人事ではなかったはずである。なぜなら、荒廢した常陸宮邸を買い取ろうと画策する「受領ども」の姿は、そのまま父孝標の姿と重なるからである。そもそも上洛後の孝標一行が住み着いた「三条の宮の西なる所」とはいかなる場所であり、孝標は、その邸宅をどのようにして入手したのだろうか。

藤原定家自筆本『更級日記』の勘物から知られるのは、「三条の宮」とは「一品脩子内親王」のことであり、その邸第は「竹三条」に所在したということである。そして、この「竹三条」の位置もすでに特定されており、「三条の宮」の西隣が「三条院」であったという事情についても、角田文衛によって詳しい調査がなされている。角田論文によれば、「三条の宮の西なる所」は、おおよそ以下のような経緯を経て、孝標の入手するところとなったのである。

脩子内親王の三条宮の東洞院大路を距てた西隣（左京三条三坊十五町）は、永らく資子内親王の御所であった。長和四年（一〇一五）四月に内親王が薨じた後、上野介・藤原定輔はこれを買得し、三条天皇に献上した。天皇は讓位の後、この三条院に遷幸され、寛仁元年（一〇一七）五月、ここで崩じたのであった。それから間もなく、

上総介・菅原孝標は自邸とするため、三条院を購入した。『更級日記』に寛仁四年（一〇二〇）十二月二日のこととして、

いと暗くなりて三条の宮の西なる所に着きぬ。

と見えるのは、孝標とその家族がもと三条院と称された邸宅に着いたことを意味している。（中略）孝標一家は、竹三条宮の西向いの邸宅を豫め購入しておき、ここに落ちついたのであった。<sup>13)</sup>

三条院の崩御の年（寛仁元年）は、孝標が上総介に任じられた年でもある。その孝標が、四年の後、上総介の任果てて上洛した際には、そのまま「三条の宮の西なる所」に落ち着いているわけだから、彼はこの邸第を上総赴任中に購入していたことになる。彼が果たして「おもしろき家造りこのむ」人であったかどうかは分らないが、三条院購入に至る経緯に関して言えば、先の女房の発言に見られる「この受領どもの、おもしろき家造りこのむが、……ほとりにつきて、案内し申さするを……」といった事情は、孝標の場合も、蓬生巻に語られている事態とさほど違いはなかったと思われるのである（「案内」の発端は、上総介の財力に期待する三条院方からのものという可能性もあるが）。さて、購入の具体的経緯はどうあれ、上総介の孝標が上洛に当たって三条院を買得していたという事実そのものは動かしがたいところであり、とすれば、そのように新たに購入された家にあつて『源氏物語』に読み耽り、蓬生巻に至って常陸宮邸買得を画策する「受領ども」の姿を目にすることになった孝標女の胸中については、やはり忖度しないわけにいかないであろう。三条院を買得した上総介の娘である彼女の立場は、この場合明らかに「受領ども」の立場に近いはずであるが、少なくとも『更級日記』の記述を見る限り、そうした点はまったく問題にもされていない。そして、それはなぜかという問いは、そのまま『更級日記』に刻まれた孝標女の自己像を検証する作業と重なるはずである。

すでに見てきたように、「三条の宮の西なる所」の有様については、足柄山のように鬱蒼と樹木が生い茂って「都のうちとも見えぬ所のさま」であることが、繰り返し強調されていたわけだが、「ひろびろと荒れたる所」という表現は、書き方次第では、そのような宏壮な邸宅での生活を成り立たせる財力について暗示する文脈を導くことも可能だったはずである。しかし、孝標女の筆は、決してそのような方向へ向かうことはない。荒涼とした邸宅でひっそりと物語を読む女というのが、彼女の描く自画像であり、これではまるで零落した常陸宮の姫君の立場に身を置いたようなものである。物語になぞらえるというのなら、本当は、金持ちの受領の娘という役どころこそ彼女にふさわしいものであり、当時の彼女の生活は、相当にしっかりした経済的基盤に支えられていたはずであるのに、そうした現実を敢えて黙殺した上で、『日記』はあくまでも主観的な自己像を描き出そうとするのである。そして、そのような多分に主観的な自己像が、作者の構成的意図と無関係に偶然成立したものであるとは考えにくく、実情は、記事の取捨選択や一面的強調等によって意図的に創り出されたということであろうから、そのとき作者は、当然のことながら、自分が過去の人生の多くの側面について沈黙を決めこんでいるという事実にも自覚的だったはずである。そして、その場合、自身は敢えて触れることをしなかった受領層のありようについてまで紫式部の筆が及んでいるという事実は、『日記』における意図的な沈黙との対比において、かえって強く意識されることにもなったと思われるし、あるいは逆に、蓬生巻の当該場面や、東屋巻における浮舟の継父常陸介の描写に代表されるような、『源氏物語』における受領層の取り上げられ方が、『更級日記』に、このような沈黙を要請することになったとも考えられるのである。

以上のような観点に立てば、『源氏物語』に対する直接的な言及の有無といった次元を越えて、『更級日記』の一連の記事の背後に蓬生巻の影を認める読みも成り立つはずであるが、同様の観点から捉え直した場合、たとえば次のような記述などは、どのように考えたらよいのだろうか。

……物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

よく知られた『源氏物語』耽読場面の一節であり、先に見た自邸の景色を描いた二つの記事の間に置かれている文章である。『源氏物語』に魅入られた少女の心が、いかに「はかなくあさまし」いものであつたかを強調するために、作中人物との同一視という、読書体験の最も素朴な一面が特筆され、さらには、「私は今は器量がよくないけれど、年頃になったらこの上なく綺麗になって、髪もとても長くなるでしょう」といったことが、いかにも幼さを強調した筆致で書き加えられているのである。

ここで語られている「われはこのごろわろきぞかし」という自己認識が、どの程度の客観性を有するものなのかは分らない。右の文章そのものが、見ての通りきわめて意図的に組み立てられたものであるから、発言の内容をそのまま真に受けるのもどうかと思われるし、美醜の判断などもとと主観的なものと言うこともできるわけだ。問題は現実の孝標女的美醜ではなく、「われはこのごろわろきぞかし」などという言葉が作中に存在していることの意味である。もちろん孝標女は、「(末摘花のように)器量がよくない」などとは一言も口にしてはいない。しかし、右の文章を包み込む一連の大きな文脈の持つ意味について考え合わせ、「(末摘花と同じように)宏壮ながら荒れ果てた邸のなかで物語に読み耽る少女の言葉として捉え直すとき、「われはこのごろわろきぞかし」という発言は、随分と意味深長なものとして浮かび上がってくるのではないだろうか。そして、そこまで読み込んだときはじめて、「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし」という言葉にこめられた作者の皮肉な意図も、十全なものとして理解されるはずである。

さて、以上、二点（「ひろびろと荒れたる所」、「われはこのごろわろきぞかし」）にわたって蓬生巻と『更級日記』の共通性について検証してみた。右の論述の過程では、孝標女が富裕な受領層に属していることを強調するような形になったが、人間の幸不幸が経済的安定といった事柄のみによって左右されるものでないことは言うまでもない。強いて幸不幸を定めるというのであれば、『日記』の記述に従う限り、『源氏物語』と出会ったときの孝標女は、ひどく不幸な気分沈んでいたのだと言うほかあるまい。当時の彼女は、最も親しい人々との生別、死別という辛い出来事に立て続けに遭遇して、「せむかたなく思ひ嘆」いていたからである。そんな彼女の「思ひくんじた」心を慰めるためにこそ、『源氏物語』は求められたのである。現実の不如意を痛切に意識させられているという点でも、孝標女と末摘花にさほどの違いはなかったとも言えるのである。ただし、ふたりの共通性をめぐる議論については、ひとまずここまでということにしたい。ここから先、ふたりの女性それぞれの物語とのかかわり方にまで考えを及ぼすならば、そこにはやはり大きな違いを認めざるを得ないからである。引き続き、孝標女と末摘花の差異について考えていくことにする。

### 三

前節まで、蓬生巻には末摘花の物語を読む姿が描かれていると繰り返し述べながら、その肝心の場面の検討が後回しになってしまったが、以下の記事に見られる通り、彼女は決して優れた物語読者というわけではない。彼女の読書する姿（あるいは読書の仕方）は、次のように否定的なものとして描かれているのである。

はかなき古歌かうた、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをもまぎらはし、かかる住ひをも思ひなくさむるわがなめれ、さやうのことにも心遅くものしたまふ。わざとこのましからねど、おのづからまた急ぐことなきは

どは、同じ心なる文通はしなどうちしてこそ、若き人は本草につけても心をなくさめたまふべけれど、親のもてかしづきたまひし御心おきてのままに、世の中をつつましきものにおぼして、まれにも言通ことひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、古りにたる御厨子あけて、唐守からもり、藐姑射はこやの刀自、かくや姫の物語の絵に画きたるをぞ、時々まさぐりものにしたまふ。

訪う人もない荒れ果てた邸に暮らす姫君にとって、「古歌、物語などやうのすさびごと」は、つれづれを慰める恰好の手段なのであるが、この姫は「さやうのことにも心遅くものしたまふ」という有様である。「心遅し」とは心の動きが鈍いということであり、「古歌、物語」に対して「心遅くものしたまふ」とは、それらに対する鋭敏な関心が育っていないということである。それに対して、孝標女の方はといえば、彼女が少女時代、それもまだ物心がついたばかりと言ってもよいくらいの早い時期から、頻りに物語を求めて親を責め続けたということは、作中に繰り返し記されていることであるし、何より彼女は、物語への関心の芽生えを人生の始発に位置づけることによって、その自伝的『日記』を書き出しているのである。物語に対して「心遅き」末摘花と「心疾とき」孝標女との対照性は、際立つて鮮やかと言うほかない。そして、そのようなふたりであつてみれば、当然のことながら彼女らの物語に向き合う姿勢は異なるし、また、具体的に彼女たちの読む物語に関しても、相応の違いが存することになるのである。

孝標女が上総で暮らしたのは、数え年十歳から十三歳までのことであるが、『更級日記』の冒頭部分の記述によれば、すでにその当時から、彼女は『源氏物語』への強い関心を募らせている。

あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、い

とどゆかしさまされど……

姉と継母の語ってくれる多くの物語の中から、「光源氏のあるやう」だけが具体名を挙げて特筆されているのは、断片的な情報からであっても、孝標女にとって「光源氏のあるやう」は、「その物語、かの物語」の中に紛れてしまったようなものではないと判断されていたことを示すものと思われる（他の物語の名前が記憶の彼方に消えてしまったのだとしても同じこと）。当時の孝標女の年齢について考え合わせれば、驚くべき早熟ぶりとも思われるが、そうした彼女の理解は、すべて姉、継母の語りを通じて得られているわけだから、右の記述については、同時代の読者の間ですでに『源氏物語』が特別な作品として高く評価されていた事実を反映するものと受け取ることもできよう。いずれにしても孝標女は、物語史に転機を画すことにもなる革新的な作品に、幼くして早くも心奪われていたのである。

そのような孝標女に比べて、もともと自ら積極的に物語を求めるつもりもない末摘花の場合、古びた厨子をあけて「時々まさぐりものに」するものはといえば、「唐守、貌姑射の刀自、かくや姫」といった古物語の類なのである。このうち『唐守』と『貌姑射の刀自』は散逸物語であるが、いずれも『竹取物語』風の伝奇的（神仙譚的）恋愛譚であり、成立の時期も『宇津保物語』以前と推定されている。『唐守』の方は『宇津保物語』や『伊勢集』によって、『貌姑射の刀自』は主として『風葉和歌集』や『河海抄』から、わずかにその内容を窺うことができるが、このうち『唐守』については、末摘花物語との関係をめぐる重要な指摘が、石川徹によってなされている<sup>14</sup>。

『宇津保物語』の記述をもとに丹念に『唐守』の粗筋を復元した石川論文によれば、『唐守』の物語とは、からもり長者の秘蔵の女の許に苦労の末辿り着いた懸想人が、その女性が「かたは人」であることに気づいて失望落胆するといった内容である。これは、「頭中将と一寸した鞘当まで演じて手に入れた故常陸宮の姫君が、話に聞いて奥床しく思つてゐたやうな深窓の美女」ではなかったことに気づいた光源氏の驚き、失望と同じであると論じる石川は、さ

らに、『源氏物語』における末摘花の容姿が、

まづ居丈の高う、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あな<sup>かたは</sup>と見ゆるものは、御鼻なりけり。

(末摘花巻)

と描かれていることなども踏まえて、「<sup>かたは</sup>人物語たるこの『からもり』物語こそ、末摘花物語の構想の原拠と考へてゐる」と結論づけるのである。

『唐守』の筋書きと末摘花物語の類似は一見して明らかであり、右のような考え方は十分に成り立ち得ると思われるが、同論文では、さらに続けて紫式部の意図についても、次のような説明がなされている。

紫式部が、蓬生巻で、末摘花の愛読書の一つにこの「からもり」を挙げたのは、彼女がみづから読者を楽屋に案内して、鬘を脱いで見せたものでもあらう。またおのれ自身こそ、「かたは人」といふべき可哀さうな女であるのに、それとも気づかずに何心なくからもり物語を読み返してゐるといふ所に、末摘花のお人好しぶりをみごとに描破しつつ、一方、多少の差こそあれ、この種の滑稽を地でおこなつてゐるに違ひない世の多くの小説読者への、紫式部らしい人知れぬ皮肉な刺笑と見れば見られぬこともない。

警拔な指摘である。そして、前節までの論述を考えたとき、ここで「紫式部らしい人知れぬ皮肉な刺笑」と言われている秘められた作家の意図は、少なくとも同時代のひとりの読者によって、正しく読み取られていたとすることができのではあるまいか。『源氏物語』を読みながら、自分の器量のことを棚にあげて夕顔や浮舟に憧れる少女というものは、右のような観点からすれば、紛れもなく『唐守』を読む末摘花と同種の「滑稽を地でおこなつてゐる」ということになるであらう。『唐守』を読む末摘花を描いた『源氏物語』を読む孝標女——ここからは、入れ子細工めいた相似的二重構造が看取されるのである。しかも『日記』執筆時の孝標女は、『源氏物語』に眩惑される少

女の心がいかにはかなくあさまし」いものであったかを強調するために、文飾を凝らしているわけだから、言うまでもなく彼女はこのとき、末摘花ではなく紫式部とこそ同じ立場に立っているのである。『唐守』という物語を持ち出すことにこめられた紫式部の風刺的意図が、末摘花のみならず読者にまで及ぶものであったとすれば、「われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば……」という孝標女の言葉は、『源氏物語』の読者の立場からなされた、紫式部に対する返礼であつたとも捉えられるのである。

さて、以上のように、作中における物語との関係の描かれ方という点では、末摘花と孝標女は対照的である。しかし同時に、少女期の物語体験について書き進める孝標女の立場と、末摘花を造形する紫式部の立場は、相似的なのである。そして、『更級日記』の執筆に当たつて、孝標女が『源氏物語』に対してどのようにこまやかな注意を払い、更にはどのように紫式部を意識していたかといった事情に関しては、先に見た末摘花の読書場面に続いて、次のような記事が置かれているのを見ることによつても確かめることができる。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも読人よんどをもあらはし心得たるこそ見どころもありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどは、いとすさまじげなるを、せめてながめたまふをりをりは、ひきひろげたまふ。今の世の人のすめる、経うち読み、行ひなどいふことは、いとはづかしくしまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。末摘花巻以来、この姫君の教養の古風さや言動の「うるはしさ」は、繰り返し言及されていた。それはしばしば、満足以歌も詠めない役立たずの教養や、余りに極端な「つつましき」として、戯画的に語られてもいたのであるが、ここに至つて「うるはし」という言葉は、徹底して皮肉な意味合で用いられるようになってゐる。しかし、ここで問題にしたいのは語られている事柄の内容ではなく、つれづれを慰めることすらままならない末摘花の「心遅さ」を言

うために、これら一連の文脈が、物語、和歌、仏道修行の三点を取り揃えて持ち出していることの意味である。なぜなら、これら三つの事柄は、『更級日記』を成り立たせる要件としても、重要な意味を担っているからである。

『更級日記』において、物語、和歌に対する思いと仏道修行に対する思いとが、どのように対立拮抗し合っているかという点に関しては、すでに他の機会にも度々触れているので、ここでは繰り返さないが、たとえば少女時代の「あらましごと」について語った次の文章など、表現の上でもかなり直接的に蓬生巻と響き合うもののように見えるが、如何であらうか。

……このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず、からうじて思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおぼえけり。

もちろん孝標女の場合には、仏道修行に関心を向けず物語や歌に心を奪われていたということが問題なのであり、末摘花の方は、物語、和歌、仏道のいずれに対しても「心遅く」て取り柄がなかったわけであるが、そうした差異はそれとして、これまでの議論の上に立つて見るとき、「このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず」（『更級』）、「今の世の人のすめる、経うち読み、行ひなどいふことは、いとほづかししたまひて……数珠など取り寄せたまはず」（蓬生巻）という表現の類似など、ただの偶然とも思えないのである。もつとも今も述べたように、物語、和歌、仏道の三点は、『更級日記』全体の存立にもかかわる要件であり、そうした問題に関して、蓬生巻との影響関係といった点にばかり目を向けたところで、余り意味のある議論が成立するとも思われない。そのような議論は、結局のところ、孝標女が『源氏物語』を総体としてどのように受け止めていたのか

という、より大きな問題の中に位置づけられなければならないし、たとえば『更級日記』における文芸意識と宗教意識の葛藤の問題にしても、それを紫式部からの思想的影響といった観点から捉え直そうとするならば、『源氏物語』のみならず『紫式部日記』や『紫式部集』をも射程に入れておかなければならないことは言うまでもない。以下、論のはじめとして『紫式部日記』の一節に触れておくことにするが、この記事なども、あくまで本稿の議論の範囲に限ってみても、いろいろと興味深い問題を含んでいるのである。

紫式部のつれづれなる日常を描いた一節である。

大きな厨子ひとよろひに、ひまもなく積みてはべるもの、ひとつには、古歌・物語のえもいはず虫の巢になりたる、むつかしくはひ散れば、あけて見る人もはべらず。片つかたに、書ども、わざと置き重ねし人もはべらずなりにしのち、手ふるる人もことになし。それらを、つれづれせめてあまりぬるとき、一つ二つ引き出でて見はべるを、女房あつまりて、「御前はかくおはすれば、御幸はすくなきなり。なでふ女か真名書は読む。昔は経読むをだに人は制しき」と、しりうごちいふを……

「古歌・物語」を積み上げた厨子に囲まれた紫式部の日常は、蓬生巻の末摘花のそれと何とよく似ていることだろう。ことに「昔は経読むをだに人は制しき」という女房の言葉に至っては、諸注も指摘するように末摘花の受けた古風な教育そのままである。これほどの類似をまったくの偶然と考えるとしたら、その方が不自然というものだが、ではこれが偶然ではないとしたら、事態は一体どういうことになるのだろうか。もちろん末摘花の造形に当たって、紫式部が自身の日常を部分的に投影するというようなことはあったかもしれない（そもそも紫式部の厨子の中にも、『唐守』、『貌姑射の刀自』、『かくや姫』といった物語は、存在していたはずではないか）。しかし、『源氏物語』と『紫式部日記』の関係について言えば、『紫式部日記』の執筆時にすでに『源氏物語』が流布しはじめていることは、

『日記』の記述からも明らかなのである。すなわち、『日記』執筆時の紫式部は、かつて自身の作り上げた末摘花の人物像を踏まえながら、自嘲的にその自画像を描いてみせたのだと捉えることもできるのである。

『更級日記』に対する紫式部の影響を考える場合、『紫式部日記』におけるこのような自画像の描き方についても、今後は慎重に配慮していかなければならないだろう。なぜなら、自嘲的ポーズにしても、さりげない引用の仕掛けにしても、『紫式部日記』と共通の特質として、『更級日記』においても全編を通じて確認できる事柄だからである。本稿において検討した『更級日記』と蓬生巻の関係の問題にしても、そうした『紫式部日記』との関係を考慮に入れることによって、より十全な理解が得られることは言うまでもない。逆に、右のような『紫式部日記』のありようを念頭に置いた上で、なお且つこれまでの検討課題を単なる表現技巧上の影響の問題としてのみ捉えようとするのであれば、それは問題の矮小化というものである。孝標女が、少女時代の物語熱の「はかなさ」「あさましさ」を言うために末摘花のイメージを利用していること——そこに、先に見た『紫式部日記』の記事を媒介項として重ね合わせる時、彼女は単に都合よく『源氏物語』の一節を利用しているというばかりではなく、より本質的に、物語の作中人物のイメージを利用しながら自嘲的に自画像を描く方法をこそ、紫式部から学び取っていたのだという読みが可能となるのである。そして、そこまで考えるならば、事は表現上の問題を越えて、ふたりの女流の精神的位相の近似性といった問題にまで至りつくはずである。もとよりこのふたりはそれぞれに明確な個性の持ち主であり、両者の間には大きな懸隔が存在することも確かである。しかし同時に、生きることの上でも書くことの上でも、孝標女が紫式部から多くを学んでいることもまた、動かし難い事実なのである（そうでなければ『更級日記』は現在のような形で成立するはずもなかった）。多くの差異と類似性の存在を交々認めた上で、果たして孝標女は紫式部の精神的正嫡と見なし得るのかどうか——本稿における考察は、そうした問題について考え進めるための手掛かりを探る試みでもあったのである。

- (1) 引用は、石田穰二、清水好子校注『源氏物語』（新潮日本古典集成）に拠る。
  - (2) 引用は、秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成）に拠る。
  - (3) 引用は、「枕草子『大進生昌が家に』」の段——竹三条宮について——（角田文衛著作集4『王朝文化の諸相』所収）に拠るが、もともとこの調査結果は「菅原孝標の邸宅」（『古代文化』昭和四〇・七）という論文に発表されている。なお、孝標女は「いづこにも……」の歌に続けて、「このごろ、皇太后宮の一品宮の御料に、六角堂に遣水をなむ造る」と告げられる夢を記しているが、皇太后姁子（三条帝皇后）も、その娘の一品宮禎子内親王も孝標邸の先住者であり、彼女がこうした夢を見ていることの意味なども、さらに検討されなければならないだろう。
  - (4) 石川徹「竹取から宇津保の頃までの物語に就いて」（『古代小説史稿』所収）。以下の引用は、すべて同論文に拠る。なお、『貌姑射の刀自』の詳しい内容については、小木喬『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』を参照のこと。
  - (5) 『更級日記』の夢——作者の精神史の側面——（『日本文芸論稿』昭和五五・六）、「日記と物語の関係をめぐって——『更級日記』を中心に——」（弘前大学人文学部『文経論叢』平成四・三）等参照。
  - (6) 引用は、山本利達校注『紫式部日記 紫式部集』（新潮日本古典集成）に拠る。
  - (7) すでに多くの議論もあるように、末摘花は決して一面的に否定的な人物として造形されているわけではない。確かに極端なまでに戯画化されているものの、末摘花のありようを描く紫式部の筆致からは、ときに同情や共感の念も看取されるのである。
  - (8) 『源氏物語』全編の正確な成立時期を知ることができないが、『紫式部日記』中の幾つかの記述（このわりに、わかむらさきやさぶらふ」、「源氏の物語、御前にあるを」等）から推して、『日記』の執筆時に末摘花物語が成立していたことは、ほぼ間違いないと思われる。
- なお、『紫式部日記全注釈』（萩谷朴著、昭和四八）は、当該部分に関して『蜻蛉日記』からの影響を重視する見解を示している。確かに、「あはれ、今様は、女も数珠ひきさげ、経ひきさげぬなしと聞きしとき、『あな、まさり顔な。さる者ぞ、やもめにはなるてふ』など、もどきし心は、いづちか行きけむ」という『蜻蛉日記』の表現は、『紫式部日記』や『更級日記』の先蹤として、重要な意味を有すると思われる。ただし、そのことは、当該記事の執筆に際して蓬生巻が意識されていたという可能性を排除するものではない。一方でそうした『蜻蛉日記』との関係を認めるとしても、蓬生巻との間に、場面全体にかかわる顕著な類似性が存在することもまた確かなのである。両者は、同時に成り立ち得る事柄として理解するべきであろう。